

「偽滿皇宮」見學記

今年(2010年)の6月16日は舊暦5月5日、端午の節句であつた。中國政府が何を考へたのかは寡聞にして知らないが、この日を含めて14(月)・15(火)・16(水)日が3連休となつた。尤も、12・13の土日兩日が振替へで勤務日となつたのであるから、週日中の3日だけが孤立せずに、3連休になつただけのことである。巷では、どうせの事なら16(水)・17(木)・18(金)を連休にすれば、5連休になつたのにねえー、などとお上の有難いお慈悲に怨みごとを囁く人民が居ないではないが、それは親の心子知らずといふものである。

しかしまア、事の次第はどうあれ、連休は連休である。14・15兩日は空模様に若干の不安があつたので見合はせてゐたが、16日は連休最後の日であるからといふので、満洲國皇帝愛新覺羅溥儀が居城とした「偽滿皇宮博物館」見學に出掛けることとした。幸ひ朝から晴天である。5月中旬にはThe First Emperor秦始皇帝嬴政ゆかりの咸陽と西安行きを果たした。今日はThe Last Emperorが、慘めな補遺と化してしまつた前半生の15年間を過ごした小さな居城である。しかし最初の皇帝も最後のも、スケールの違ひは止むを得ないとしても、いづれも終はりが善くない。

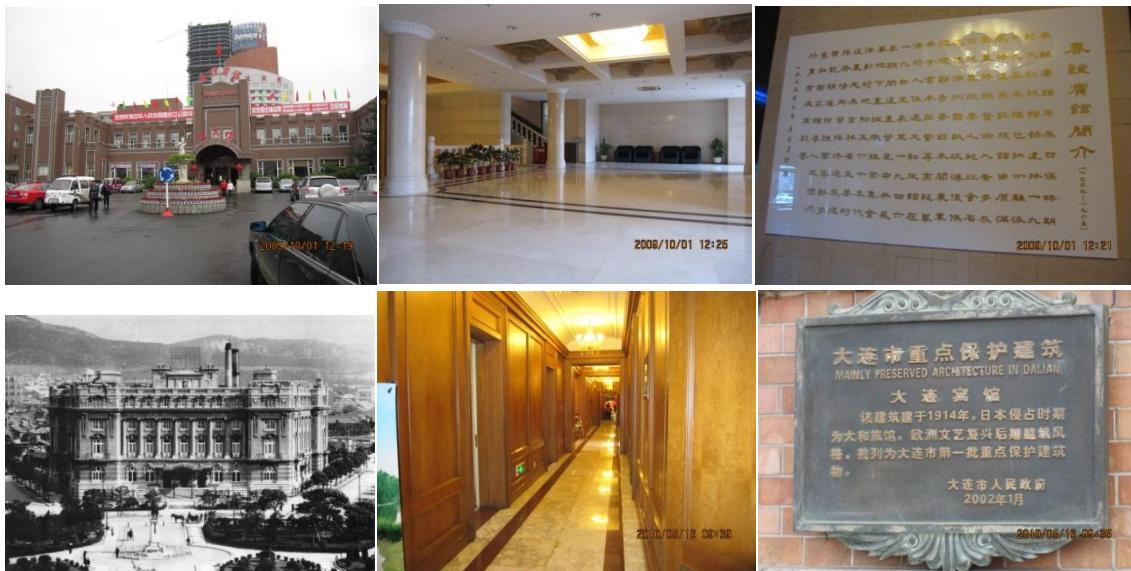
長春駅の間近までバスに乗る。比較的すいてゐたが座席はない。降り口の傍に立つてみると30歳前後の婦人が腰を浮かして席を譲りさうな氣配を示したので、手を振り、いや丈夫との身ぶりを示して、ニッコリ笑つた。と、少し離れて坐つてゐた幼稚園年長組位の少年が私を見て何か云ひながら席を離れた。子供の好意は素直に受けなければならない。私は礼を言つて腰掛けた。子供は先程の婦人の膝に乘つた。帰りのバスはかなり混んでゐた。最後に乗つて昇り口の邊りに立つてみると、若い女性が聲を掛けた席を譲つて呉れた。私は可成りの老人と見られてゐると言ふことなのだらうか。

駅前の舊大和ホテル(現・春誼賓館)前から東南に道を取つて、舊東廣場(現・南廣場)に出た。途中に舊横濱正金銀行長春支店の石造りのこぢんまりした二階建ての建物があつた。入り口の庇の御影石に「横濱正金銀行」の文字が彫られてゐる。屋上の正面には長春雜伎宮の大きな文字がある。

春誼賓館正面は撮影當日建國60周年の慶祝横斷幕が張られて賑やかであるが、現在は二流の旅館と言つた所であらうか。右は二階のロビーである。良質の大理石を使用した落着いた雰圍氣の空間である。ただ現在の我が國のホテルと較べても、天井が可成り低く感じられる。中央の寫眞は光線の具合で読み難いが入口の壁に掛けられた由緒を説明した大理石の板である。長春鐵道附屬地の最初のプランに、ホテルとして既にこの場所が書き込まれている。

大連の舊大和ホテルは、ロータリーを形作つて中山廣場に面して建てられた日本統治時代の舊建築群一つとして、現在も營業中である。もっとも、現在は雨漏りや老朽化のために使用していない部分もあるらしい。とはいへ、規模も内部の結構や施設も長春大和ホテルよりも贅を盡している。言迄もなく、大連は南満洲鐵道本社の所在地である。撮つ

たはずの大連大和ホテルの映像が、どうした譯か見あたらないから、戦前の寫眞の繪葉書をスキャンして示す。



さて長春の現在に戻る。南廣場はロータリーとなつてゐる。このロータリーの周圍にも、舊滿洲國時代の建物がそのまま遺つて使用されてゐる。扇状の建物の要に當たる廣場に面した部分が入口になつてゐるのが特徴である。20世紀初頭に歐洲で流行した様式である。

大きな勝利大路を避けて、もう一本北側の道を取ると、間もなくゴミゴミした廣場に出た。左側に乾物屋・香料屋・紙屋などが並び、廣場には屋台の青物屋・食ひ物屋などが店を出してゐる。全體が雑然としてゴミが散らばり、清潔とは言へない。乾燥した棗・葡萄・ミニトマト・キューウイなどや胡桃・榛・椎・榧・向日葵・南瓜の種などの乾果（名前を知らない、初めて見るものも可成りある。表面が滑らかで南京豆の2~3倍はありそうな胡桃にもお目に掛かつた。胡桃の味がするから不思議である。下の寫眞がそれである）が豊富に並べられてゐる。異邦人が紛れ込むのは珍しいのであらうか。誰も聲を掛けで呉れない。日本人(ribenren)という言葉が時々聞へた。特に不快な視線には出合はなかつた。一般的に言へば、街の中で日本人だと言ふことで特別に硬い態度を示す人には殆ど出合はなかつた。尤も、外國人と見て吹つ掛けるのは屢々である。これは特に日本人だからといふ譯のことではない。氣取つて言へば、文化人類學的な觀察の機會と心得れば、嗤つて済ませることができる。皆氣さくな態度でにこやかで親切に對應してくれる。景品を手渡すのを忘れたとて、デパートの階段を2・3階驅降りてきた若い女性店員があつた。



店先を素見やかしながらユックリ通過ぎると、草丈の高い雑草が茂つた空き地に出た。轍の跡がある泥濘の小道が木立の中に消へてゐる。目指す皇宮はこの方角だが、と注意してみると、草叢を透かした向かうにコンクリート造りの赤紫の屏の角が見へてゐる。近寄つて南側を見ると、屏に沿つて 6~700m 程先に大きな門がある。門の脇のチケット賣場で老人半額料金 40 元（この種の入場料として成人 80 元は些か貴いやうに思ふ）を拂つて中にに入る。そこは小さな馬場で、奥に厩舎も見へる。皇宮全體のプランを下に示す。直ちに内廷に向ふ。因みに言ふ、1999 年に舊王宮として案内された建物はこれと違つていたやうに思ふ。三階建ての古びたコンクリート建築であった。好太王碑文のレプリカがあつた。あれは何であつたのか、當面は質す手立てがない。案内者の偽計であつたのかも知れない。



正門（この右手に、觀光客出口がある）案内圖

内廷入口(門の手前は馬場である)

内廷には幾つかの建物があるが、すべて二階建てのこぢんまりとしたもので、それらが狭い區割の中に配置されてある。案内圖には縮尺は示されてゐないが、配置圖を見て、全體の結構は推測できるのではなからうか。案内板に示された「偽皇宮」のプラン全體の横幅は 1 km 弱であらう。それぞれの建物の名稱や用途を詳説しても餘り意味があるとは思へない。皇帝の家庭生活に供せられる私的セクションと公式行事或いは謁見、執務の爲の公的セクションは建物で區別されてゐる。その内部を寫眞で示しておかう。

休日の所爲もあつてか、見物客の數が多い。私は「偽滿洲國」の遺跡であるからして、當然、見物客の姿は尠なく閑散としてみると豫斷していたが、それは全く間違ひであつた。ここは、漢族の過去の民族的な屈辱の歴史を確認するための史跡なのである。漢族の若者



がグループで來ているやうである。館内のそちこちに屯している制服姿の若い女性は案内人のやうである。私が見物している背後で、riben, riben と聞へて振向くと、そのような案内人の一人に率いられた一團がごく熱心に説明を聞ひてゐる。さうしたグループが幾つも

聯なつてゐる。中には私を日本人と認識してか、ジロリと、或いは冷ややかに、此方を見詰める視線にも遇ふ。私はさうした視線を無視して、無表情で應じる（いや、或いは冷い視線を反してみたのかも知れない）。吾不關焉。愛國主義教育の負の標的として日本及び日本人を利用するこことについては漢族（或いは、漢族政權）なりの事情はあらう、しかしさうした事情に對して私は何等の共感ないしは同情(sympathy)も持たない、不快を感じるばかりである。かうした不快感は、北洋艦隊の根據地であつた威海衛灣内の劉公島にある博物館の「愛國教育中心」でも、旅順口における漢族觀光客の視線にも感じたものである。

2010年5月初旬に旅順口灣口を外洋から見る機會があつた。右手に突出た灣口の突堤の小高い丘の上に見へる工作物を指して、舳先にいた同行した朝鮮族の學生に大きな聲で、あれは何だらう、と訊ひた時、前の座席の中年婦人が振向いてジロリと睨付けた視線の險惡さは唯事ではなかつた。案内人は單なる建築物だと答へた由である。下の寫眞の左が旅順灣口部である。海軍施設があるために灣内へは入れず、渤海灣側から見たのである。觀光船が回頭した際に艤から撮つたもので、畫面が傾斜してゐる。白玉山塔は、日本統治時代に戦歿者の忠靈塔として建てられたのである。この一見奇妙な形は蠟燭を模つたもの由。この塔の立つ岡は旅順灣の背後にあり、灣内が一望できる。パノラマ畫面で撮つたフィルムの状態が悪るく、鮮明な畫像を得られなかつたのは残念である。（2年前に装着してその儘になつてゐたフィルムであつた）。旅順灣は現代海軍の基地としては規模が小さく、軍事施設



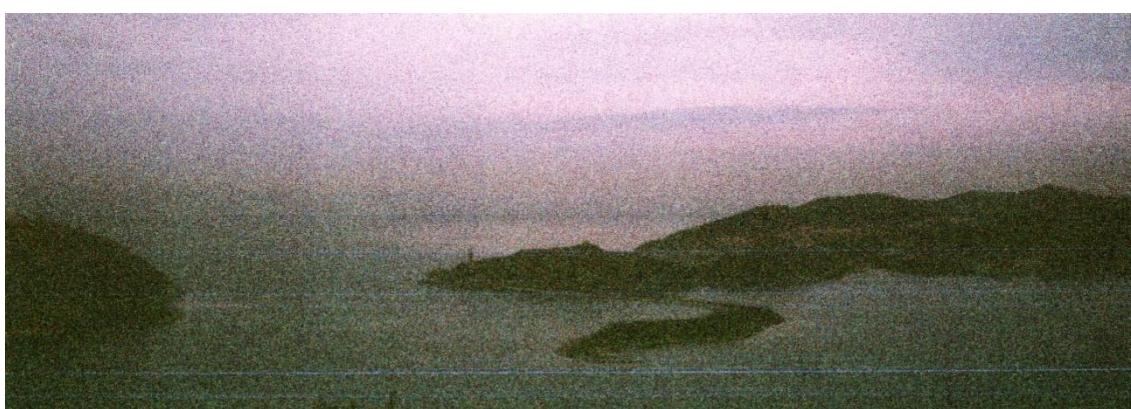
閉塞戦のあつた旅順灣口を渤海灣側から



旅順灣を間近に見下す白玉山塔と入口の立札（銘記歴史、勿忘國耻）



2010/05/16 14:34



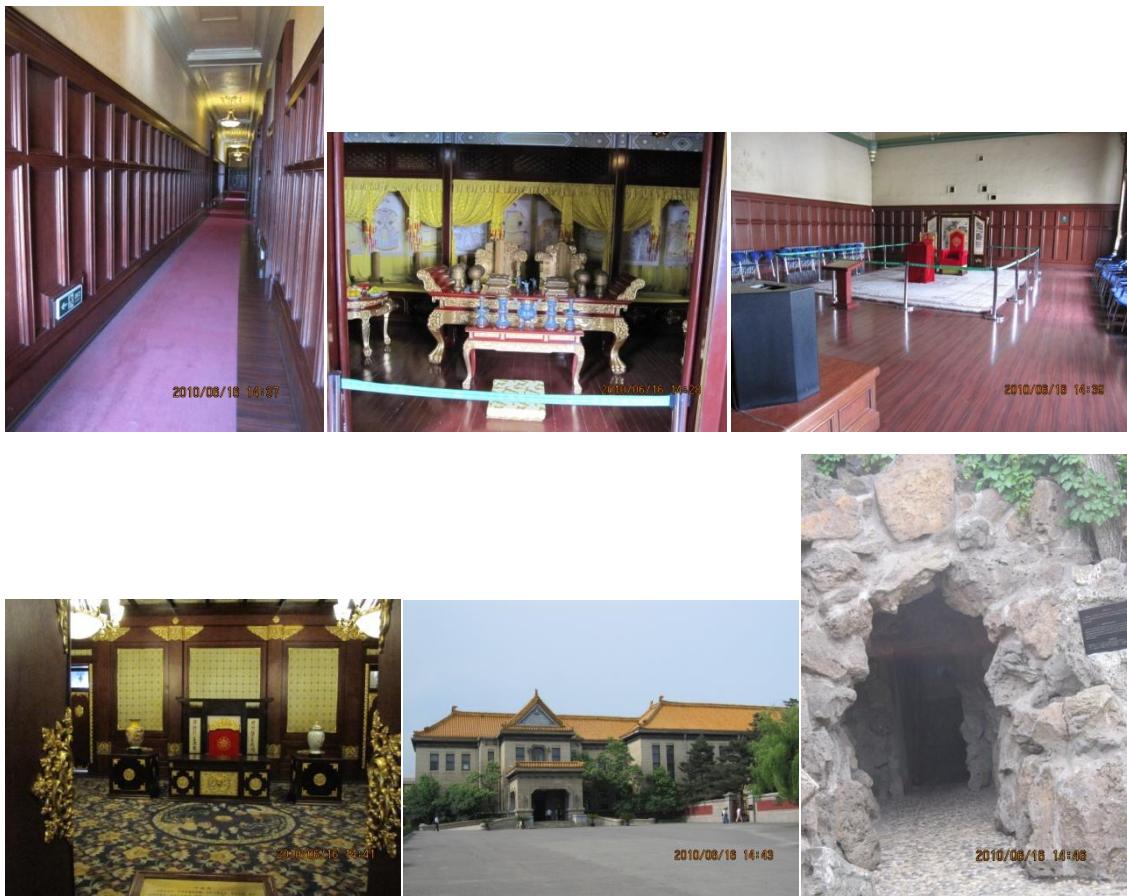
としての重要性を失つてゐるやうに見へる。最近陸上からの眺望が解禁されたのはそのやうな事情にもよるのであらう。



さて「偽皇宮」の皇帝の私生活の部分は、上段左二つの居間、右の寵姫譚玉齡夫人の書斎、下段薄倖の婉容皇后の寝室（皇后は溥儀に疎じられ、寂しさを紛らはす爲に阿片に溺れ、愛人を作った、と説明板にはあつた）。建物の一角に純日本間が設けられてみたのはどちらの建物であつたのか。今となつては定かな記憶がない。寫真を撮るのも物憂かつたような記憶がある。然り而して、皇帝溥儀の書斎など様々あるが、煩はしければ略に從ふ。

次に公的部は、<お目付役>「關東軍高級參謀吉岡安直」の執務室（上段左端）、二階から見下ろした吹抜けの廊下、階段降口に通じるロビー、謁見の間、皇帝の執務室、祖先の靈を祀る祭場、皇宮正面へと續く。實に懶な案内記で恐縮であるが、撮影時間の推移によつて大方を御推測戴きたい。最後が皇帝溥儀陛下の防空壕の址であると言ふ所が情けない。皇宮の背後に「東北淪陷史陳列館」なる建物があつたが、見學を省略した。





この「偽皇宮」は、建物それ自體も、そして當然ながらそれぞれの部屋も、如何にもこぢんまりとしてゐる。建物は二階建て、建物と建物の間隔は可成り狭い。

溥儀の自傳『わが半生』（筑摩叢書）に、天津に隠棲していた溥儀に出盧を嗾した日本人謀略家達は、北京の王宮よりも廣大な宮殿に住むのだと言つたが、来てみるとお話にならない貧弱な建物だつたと書れてゐる。溥儀の指している宮殿（勿論、「偽皇宮」そのものは満洲國建國以後の建築物である）が此等の建築群に當たるのか定かではないが、北京の故宮に較べれば、確かにお話にならない。そもそも溥儀のこの自傳は、自己辯護と愚痴に満ちた、歴史的には、あるいは文學的にはと云ふべきか、殆ど價値のない文書であるが、溥儀が土肥原など陰謀家の話を少しでも眞に受けたのかも知れないと想ふと、自己辯護と愚痴を含めて、幼少時代から帝王として傳かれた人間の精神の未成熟が哀れである。

この「偽皇宮」に代る筈だつた本格的な王宮とその南に聯なる官庁群のプランが長春市街地の西側に遺つてゐる。王宮は満洲國の末期に着工されて、解放後に完成されたとのことであるが、どの程度最初のプランに従つてゐるのか、敗戦までに工事がどこまで進んでいたのかは不明である。煉瓦を積重ねて表面をモルタル塗装した建築物であり、現在は表面のモルタルがあちこち剥落して、建物のごく一部が吉林大學地質學博物館（地質宮）に使用されている外は、殆ど廢墟である。右側の寫眞は官庁群の首位にある満洲國國務院跡であり、現在吉林大學醫學部の一部として使用されている。なお、國務院は1936年11月

に竣工した我が國の帝國議會議事堂（言迄もなく、現在の國會議事堂）を模したとされている。サイズは小さいが、内部も議事堂と同じだ、と両方を知つている人が言つた。下段左は、現在新民大街と呼ばれてゐる、王宮南側に延びる官庁街の鳥瞰寫眞である。左側遠方に見へるのが王宮である。何時頃の寫眞か不明である。幅の廣い中央分離帯に植えられてる松の高さから判断すれば、3~40年程前かも知れない。殘念ながらこれと比較できる現在の新民大街を俯瞰する寫眞は撮ることができなかつた。

この「偽皇宮」とある意味で對照的であつたのは青島の舊ドイツ総督府の建造物である。周知のやうに、ドイツ帝國は1898年の列國による所謂中國瓜分から1914年に第一次世界大戰に聯合國の一員として參戰した日本軍に攻略されるまで、青島と膠州灣一帶を租借していた。上掲寫眞の下段中央に示した石造りの建造物がその當時の総督府である。近くに産する優良な石材で建造したとのことであるが、市街地を見下ろす小高い岡の上に立つてをり、現在は青島市の市廳舎として使用されてゐることである。青島のある山東省は古代の齊の國であり、古來富強を以て聞へてゐた。長春市は満洲平原のほぼ中央に位置する。兩者の地理的並びに經濟文化的立地の違いは歴然としている。現在においても、舊滿



洲地區と關内中央部との文化的經濟的格差は小さくない。單に自然地理的な違いだけを見ても、長春で良質の石材を近傍に求めることは難しい。それ故、満洲における煉瓦とモルタルによる宮殿建築は止むを得ない、そして素材の状態からして劣化も早いのである。更に農業生産力について見れば、彼此の相違を今日の日常の食卓にも感じた。しかし兩者の自然的及び歴史的な立地の違いを超えて感じられるのは、日獨の植民地帝國としての力量の、或いは歴史的蓄積の、差異である。もちろん、この點を我々は恥じ入る必要は更々な

い。然しそこに現れてゐる文化的差異については、注意を向けなければならないだらう。下段右端は青島のドイツ系カトリック教會堂である。なほ附言すれば、19世紀中葉に大英帝國が建設した上海の Bund 周邊の街並や 20世紀初頭にロシア帝國が作った大連・哈爾濱の街並も、興味深い比較の對象となるだらう。

宮殿敷地の東側を長春と吉林とを結ぶ吉長鐵道が走つてゐる。宮殿を出て亞泰大街へ出るまでの數百メートル程は、方角によっては瓦礫が散亂するゴミゴミした通りを歩かなければならぬ。この地域は現在の長春市では場末である。當時にあつてはどうであつたか、地圖からは推測できない。歸路解放廣場に出る途中であつたか、大馬路と五馬路との交差点付近であつたか、イスラム教の清眞寺とカトリック教會堂が道を隔てて向い合つてゐる場所を通つた。大馬路は長春鐵道附屬地と城壁で圍まれた舊長春市街地を結ぶ幹線道路として建設された。東側に稍膨らんだ灣曲した道筋は現在もその儘遺つてゐる。(10th March 2011)